



狩野守
『ギリシャ賛歌』 昭和62年
油彩・カンバス（181.5cm×277.8cm）
パルテノン神殿がそびえ立つアクロポリスの丘を見下ろしながら、古代ギリシヤを思わせる衣装をまとい、空を舞う女性たち。洋画家の狩野守さん（昭和4年（平成16年）は、風景と人物を融合させた想像世界を好んで描きました。

未来への贈りもの

本市収蔵作品

狩野さんは、現在の渋川市で生まれ育ちました。前橋中（現前橋高）を卒業後、群馬師範学校（現群馬大）に進学。ここで師と仰ぐ清水刀根に出会います。在学中の昭和24年、二科会に初出品初入選を果たすと、以後は二科会一筋の道を歩きました。

狩野さんの画業は大きく3期に分けられます。人物や群像を描いた第1期。昆虫をモチーフとした抽象度が高い第2期。そして、37歳の時に滞在したヨーロッパで目にした風景や人物を組み合わせた、華麗で幻想的な第3期。本作品もこの第3期に制作されました。本作品と同テーマで53歳のときに描いた「アクロポリスの丘」は、二科展で文部大臣賞を受賞しました。

昭和31年からは群馬大に勤務し、学生を指導。多くの美術教員を育てました。また、県美術会会長を務めるなど、県美術界に多大な功績を残しました。

本作品は、グリーンドーム前橋1階ロビーで見ることができます。

問い合わせは 文化国際課 ☎8608-5825

毎年11月23日に天皇陛下が神々に新穀を供え、その年の収穫に感謝する新嘗祭。宮中の行事で最も重要なこの祭典に使用するアワを献納した。

「10月29日の献納式に参列させていただき光栄です。天皇陛下へお渡ししたとき、今までの苦勞が吹き飛ぶくらい感激しました」

毎年、皇室にアワを献納している宮城地区。伝統あるこの大役は順番で各町を回り、63年目のことは柏倉町に。農業関係者や献納経験者などで構成する「宮城粟の献穀実行委員会」から、小澤さんに白羽の矢が立った。

「初めての栽培だったこともあり、夏の厳しい猛暑など、よいアワができるか、実際に収穫するまで不安でした」

これからもよい作物を作り続けたい



皇室にアワを献納

小澤 忠夫さん 70歳
柏倉町

周りからの指導を受けながら、夫婦2人、無我夢中で取り組んだ結果、見事豊作になった。

「皆さんのおかげで、黄金色のアワを作ることができました。実行委員会の方々から近年で一番の出来栄えとのお褒めをいただいて、うれしかったですね」

現在は主にネギやホウレンソウを栽培。農業に携わって約40年。朝から畑に出て、作物の手入れを行うなど、一日の大半を農業が占めている。

「息子に畜産業を譲ってからは畑一筋の生活。これからは家族で力を合わせて暮らしていきたいですね」と語る目からは、家族や農業にかける深い愛情が伝わってくる。これからは体を大切に、すばらしい作物を作り続けてほしい。



詩について和やかに語り合う

ことしの萩原朔太郎賞は、詩人・佐々木幹郎さんの詩集「明日」が受賞。賞の贈呈式を12月1日に前橋文学館で行いました。合わせて佐々木さんと第1回受賞者の谷川俊太郎さんの記念対談も。2人は笑顔を交えながら、詩について語り合いました。



歩いて巡る水と緑と詩のまち

11月23日、前橋公園を発着点にウォーキングジャンボリーを開催。およそ430人が集まり、会話を楽しみながら市内の名所などを巡りました。歩き終わった参加者たちは、振る舞われた温かいton ton汁を頬張り、心地良く疲れた体を癒やしました。



介護予防で明るいまちづくり

介護予防まつりinまえばしが、12月2日に総合福祉会館で行われました。認知症や寝たきりにならないよう取り組むためのステージ発表やコーナーがいっぱい。訪れた人たちはさまざまな体験をしながら、介護予防について楽しく学んでいました。

前橋から新しい文化を発信

全国から347作品の応募があった前橋アートコンペライブ。12月2日に前橋プラザ元氣21で、最終審査に残った25作品の公開審査を実施。多くの観客の前で審査が進み、本市出身の林麻依子さんの作品がグランプリに輝きました。

